

「かぢを絶え」と「由良のと」

鈴木浩一

藤原定家が撰んだ小倉百人一首の第四十六番目、曾禰好忠の

由良のとを渡る舟人かぢを絶えゆくへも知らぬ恋の道かな

は、良く知られた歌でありながら、その解釈は大方は曖昧なまゝ、
雰囲気で愛されて来たものであるらしい(好忠集¹⁾、新古今集²⁾、
以下出典の記載が無い歌は新編国歌大観³⁾所載のものである)。

先ず問題は第三句の「かぢを絶え」であつて、筆者は何とはなし
に「楫が折れて」と思つてゐたが、故大野晋先生は此の「を」は格
助詞ではなく名詞の「緒」であつて、『楫緒だから絶える事が出来る』
としてをられた⁴⁾。

其の時の歌の意味は、「楫緒」が切れてしまつて船頭は舟が漕げな
くなくなった、その舟(或は船頭)のやうに「恋の行方は計り知れない」
となるものであらうか。筆者は先入観の為か、それでは何かしら釈
然としないまゝ、果たしてそれ以外に解釈はあり得ぬものなのか、
語句の解釈に一層の注意を払ひつゝ、新編国歌大観を頼りに万葉以
降、類似の作例に当たつてみた。

一、「かぢを」とは

数ある例歌の中には、実際に「かぢを」を「楫緒」と解す他はな
い歌もあつて、

夫木 15873 契りこそゆくへも知らぬ由良のとや

為家

渡るかぢ緒の又も結ばで

実空

弘長百 554 かぢをたえ入江のわだをこぐ舟の

おそくも人をうらみけるかな

などがそれに当たる。為家は父藤原定家の後継者であり、実空も略
同時代の人であつて、両歌とも新古今集の後、定家が没して以後の
ものである。此の二つは、数ある「かぢを絶え」の例歌の中では例
外とも言えるもので、この他の多くは「楫緒」としなくとも歌意が
成り立つか、「楫緒」では却つて歌意を定め兼ねるものゝやうに思は
れる。

為家の歌には「切れたら繫げば良いものを」の意が含まれてゐて、好忠の元歌が持つ緊張感は失はれ、何かしら放恣な雰囲気之歌になつてゐる。実空の歌では「楫緒」が切れてもさしたる重大事ではなく、聊か漕ぎにくくなつて、せい／＼船足が落ちる程度のものとなる事が窺はれる。

仕事で海に詳しい知人(海洋生物学者)の話でも、漁師達は「楫緒」が切れれば繫いで漕ぐし、よしんば繫げなくとも何とか漕ぐもののだとの事であつた。正に此れは古註の「増註」に於ける加藤盤斎の「緒の絶えたるばかりにては、迷惑する事さ程にあるまじければ」を裏書きするもので、「楫緒」が切れたぐらゐでは「行くへも知れぬ」事態にはなり得ぬ現実を示してゐると同時に、それに依つて船足が落ちる事もあらうから、実空の歌の「おそくも人にうらまれ」る事態が起こり得る事も理解出来る。

櫓の実用化の過程から考へても、当初から櫓綱(かちを)付きで考案されたとは考へ難い。最初は櫓だけで漕いでゐたものが、櫓綱を付ければ腕の動きの軌道が定まり、格段に使ひ勝手が良くなる事が判つて、櫓綱が定着したものに違ひない。従つて櫓綱は櫓漕ぎに必須な用具ではなく、あれば都合の良い補助具に当たるもので、漁師は櫓綱無しでも何とか漕げるとは其れを裏付けるものであらう。

事実がさうであるならば、「楫緒絶え」と解する限り、好忠の歌は「靴紐が切れて歩けなくなつた」と言ふに等しく、誇大に過ぎて不自然と言ふ他はない。

為家の歌の第五句は時と共に忘れられて、「楫緒が絶え」と否応なしに舟は「行くへ知らず」になり、「ちぎりは空しく」なる様に思ひ込まされて来てゐる様に思えるが、丹後の掾(下級官吏)を勤めて

下情に通じてゐた好忠が、そのやうなあるべくもない事を歌に詠む筈がないとすれば、「由良のとを」の歌はじっくり腰を据へて読み直ほす必要があると思はれる。

「楫を絶え」の文法的解析を探つてみると、古語大辞典の格助詞「を」の義解の⑤では、「自動詞または同趣の語を臨時に他動詞的に用い、その対象を示す。」と解説があつて、用例には万葉歌などからの引用と共に冒頭の好忠の歌が引かれ、解釈が示されてゐる。

細き眉根を笑み曲がり(眉ヲ笑ヒ曲ゲ)

……………

楫を絶え(カジノ緒ヲ切ツテ)

始めの万葉歌の解釈では自動詞「曲がり」は他動詞の「曲ゲ」となり、その客体には「眉根」が当てられるものとして理解出来るが、好忠の歌の場合は重大な誤りを含んでゐるが如くである。

則ち「楫を絶え」の格助詞「を」は、解説の如くに自動詞「絶え」を他動詞「切る」とした上で、自らを普通名詞に切り替へてその客語とするもので、前例とは全く異なつた扱ひになつてゐる。

好忠の歌で「楫を」を例解の如く「カジノ緒」とすれば問題とする格助詞は消え、「絶え」が「切レル」ならば、「楫を絶え」は「楫ノ緒方切レテ」となる筈で、「楫緒」が切れても舟は漕行不能にならぬ事は上述の通りで、「行くへも知れぬ」事態にはなり得ない。

此の好忠の歌の場合、他動詞的に働かされる「絶え」の客語となるべきは「楫」でなければならぬ筈で、その時の「楫を絶え」の意味が如何にあるべきかに就いて考察を進めたい。

二. 具象名詞ではない「かぢ」

現行の解説書の多くは好忠の歌の「楯を絶え」を「楯を失って」としてゐるが、「失ふ」は「絶ゆ」の他動詞形であらうか。

筆者が育つた往時の新潟県の山村では、「絶ゆ」は日常語であつて、

筆者 「婆様、きんな(昨日)の菓子。」(「下さい」は省略)
祖母 「ハ(もはや)、絶えたヨ。」(モウ、無くなつたヨ。)

の如く幼児すら理解できる慣用表現であつた。

この「絶ゆ」は単なる「消失」ではなく、次に挙げる例の如く継続してゐた事象の消滅(残つてゐない)を意味するもので、

堀河百 83 道たゆといとひしものを山ざとにきゆるは 大江匡房
をしき去年の雪かな

新古今 1419 住吉の恋忘れ草たね絶えてなき世にあへる 藤原元真
我ぞかなしき

夫木 3714 つげの野に大山守やおさめつる氷室ぞ今も 仲実朝臣
絶えせざりける

汎用的に移動や逸失などの結果を意味するものではない。

次の用例で

旅先で持葉を絶やしてしまつて
旅先で杖を絶やしてしまつて

前者が成立するのは当然として、後者も共に成立するとするならば、その言語感覚を疑はねばならない。

「絶ゆ」はある事象の継続の終焉を意味するもので、単に「逸失」を意味するものではない。別の例を挙げるならば、

蠟燭が絶えた。
蠟燭を失つた。

では意味する処が異なる。前者は灯^{とほ}つてゐた蠟燭が燃え尽きたか、又は箱の中の全てを灯し尽くしたかで存在が消滅したことを意味するが、後者はその所在や所属が變はつて自らの感能の域外に移つた事を意味する。「絶えた」を他動詞的に表現するならば「絶やした」であつて、当然のことながら「失つた」とは意味する所が異なる。則ち「絶ゆ」の他動詞形に「失う」を充てるのは誤りである事は明らかであるが、然らば好忠の歌の「かぢを絶え」が意味する処は何かと言ふと俄かには答が見えて来ない。

視點を變へて他の類歌からその意味を探れないかと當つて見ると、定家と並び称せられ、共に新古今和歌集撰進に携はつた藤原家隆の歌の中に意外とも思える素直な用例が見い出され、其れは又凡そ百

年後に為明朝臣(?)に本歌取りされてゐる。

壬二集 2321 いくよふとかぢをも絶えし彦星の
と渡る舟の天の河かせ
家 隆

為明朝臣

題林愚 3159 かへるさのあまの河舟かぢをたえ

たどる波路に袖しほるらし

いづれも、一年も待った挙句の織女星との逢ふ瀬が、只の一宵で終はってしまった彦星の傷心を歌つたもので、此処には「楫緒切れ」や、「楫失ひ」などの突発事故を持ち込む余地はない。試みに家隆の歌の第二句に其の何れを当てゝも、初句の最後の「と」が浮いてしまふのに反して、「楫さへ手に付かず」とすれば、「と」は「傷心の深さから」となつて生きて来る。

則ちこの歌の意味は、一年も待たされた挙句、共に過ごせたのは只の一宵と、傷心の余り楫を漕ぐ手も止まつて(漕ぐのを止めた)しまつた彦星ではあるが、天の摂理の河風が、誤りなく舟を元の場所へと吹き返へして呉れる、とでもならうか。この場合の「楫を絶え」は、「漕ぐのを止める」事で、「楫」は漕ぐ動作の抽象名詞となつてゐるものと解される。(「音を絶え」と同様。こゝでは必ずしも「絶え」を他動詞に見直す必要はない)

七夕は古来数多く歌はれ、家隆よりも約百年前に、後三条天皇の第三皇子、輔仁親王が彦星の傷心をより直截且つ切実に詠まれた歌がある。

三 宮

金葉集 162 あまのがはわかれにむねのこがるれば
かへさのふねはかぢもとられず

歌趣から言へば家隆の歌の本歌に当たると同時に、その「かぢ」の用法を暗示してゐるやうに思はれる。則ち家隆の「かぢ」は具象名詞の「楫」ではなく、三宮の「かぢをとる」に当たる抽象名詞であり、別れの悲嘆から、「かぢ(楫)も手に付かぬ」有様が「かぢをたえ」であると解すべきものであらう。

三宮がその裏を歌つたかと思はれる歌が万葉集⁸⁾に見出される。

万葉集 2074 天の河霧立ち渡り彦星の楫の音聞ゆ
夜の更けゆけば

此処の「楫」は漕具名の如く見えて実はその「漕具を操る動作(抽象名詞)」なのであつて、同様な「楫の音」の用例は万葉集に数多く存在する。

「かぢを絶え」の用例は他にもあつて

中納言経通

洞院百 624 楫を絶え月にのみやはあかすべき
出潮にいづるあまのつりふね

権大納言公明

新千載 1851 久方の月のかつらのかぢをたえ

ふけてとわたるあまの河舟

何れの場合も「楫緒が切れて」とするのも、「楫が失はれて」とするのも唐突を免れず、「漕ぐのも忘れて」とか、「楫も手に付かずに」と解してこそ歌趣に沿ふものと思はれる。

又公明の歌で「楫緒絶え」とすると、「月のかつらの」が「楫緒」の「緒」に掛かる事になり、恰も「西陣織のネクタイピン」と言ふが如き語法上の齟齬を来たす。則ち此処では、日本語の語法からも「楫を絶え」を「楫緒絶え」と読む事は許されないのである。

経通は家隆とは共に新古今集に名を連ねる同時代の歌人であり、公明は為明朝臣と共に南北朝期の歌人であるから、⁷、「楫を絶え」の用法は家隆、経通等以降百年以上は存続した事になる。

此れ等の家隆、為明朝臣、中納言経通、権大納言公明の歌では、三宮の歌の如く「楫が手につかぬ」のであって、好忠の「楫を絶え」も此のやうに解すべしとするものに、鳥居小路経厚の古註、経厚抄⁸が見出せる。其処では好忠の「楫を絶え」とは「楫を捨て舟に任するよし也」と述べられてゐて、好忠の歌や此処に挙げた四歌のみならず、その他大方の歌の「楫を絶え」の解となり得るものである。「楫を捨て」は「楫漕ぎを止め」の意である事は言ふ迄も無い。

「かぢを絶え」の例歌は室町時代以降江戸時代の半ば迄細々と続くが、其れ等の「かぢ」が「楫漕ぎ」を意味してゐるか否かに就いて軽々に断ずる事は出来ない。

三、「かぢを絶え」と「由良の戸」の関はり。

「かぢを絶え」が「楫漕ぎを止めて」の意味で多くの歌で用ひられてゐる事が判つたが、好忠の歌に「由良の戸」が存在する必然性が呑み込めない。それかあらぬか好忠の歌の解説では「由良の戸」の存在はさしたる関心事となつてをらず、由良の所在地そのものも紀州、淡路、丹後と二転三転してゐる。

新古今和歌集²には曾禰好忠の「かぢをたえ」に一つ置いて撰政太政大臣藤原良経の、同じく「かぢをたえ」の歌が置かれてゐる。

1071 ゆらのとを渡るふな人かぢをたえゆくへ（曾）もしらぬ
恋のみちかも 曾禰 好忠

1073 かぢをたえゆらの湊（みなと）による舟の便りもしらぬ沖つ潮風（うしほ）

新古今集聞書としては初期の常縁原選本¹⁰とされるものでは良経のものゝみが取上げられ、その注は次の如くである。

かぢをたえはかぢをおさめたる心也。由良の渡りは大事なるわたりなればかぢをおさず波にまかせてやる也。（後略）

この歌に関しては殆ど同文の注が後代迄続いてゐる。

「かぢを絶え」が「楫漕ぎを収める」であるとするのは上掲の類歌の解釈からも納得がゆくが、その理由として挙げられてゐる「大事なるわたり」の意味する所が判然としない。疑問が解けぬまゝ現在の漁師に由良の渡りの状況を聞いてみた（電話）。

紀州由良町神谷の由良漁業組合の幹部は、「由良の戸に舟を漕ぎ入れたら、船が転覆せぬやうにするのに精一杯で、とても漕いでなどゐられるものではない」との事で、淡路の由良漁業組合の組合長からも同様な答が返つて来た。此れから推して考へるに、古註の「大事なるわたり」は「大変なわたり」と受け取つて良く、意味する所は「狂騰する波の激しさに舟を転覆させまいと守るのに精一杯で、とても漕いでなどゐられない」状況なのであらうと察せられる。結果的に此のやうな状況下では「漕ぐ作業は放棄（「かちを絶え」）され、必然的に船の行方も亦期すべくもなくなる事は十分に理解できよう。浪の荒さと楫（楫漕ぎ）の関はりが直接歌はれてゐる歌もあつて

後鳥羽「20」かちをたえ夢ちもたえぬ沖つ風吹上の浪の

音のあらさに

音のあらさは即浪のあらさで、由良の戸に限らず吹上の浜（紀州）でも波が余りに高ければとても漕いでなどゐられないものである事は、雲の上にまで聞こえてゐたものを、何故御子左家宗家の耳には届かず、「かちを絶え」を「楫緒絶え」と読み誤らせたのか、今日も大きな影響が見られるだけに、疑問に思はずにはゐられない。

此処で気が付く事は、良経の歌では「由良の戸」と「かちを絶え」とはセットとして歌はれてゐるかに見える事で、好忠はそのセットをそっくり、恰も枕の様に使つて「かちを絶え」を持出し、大海で楫漕ぎを止めるかのやうな印象を呼び起こし、恋路の持み難さを歌つてゐるが、良経の歌の場合は現実に由良の戸に即した詠み方となつてゐる。

則ち、舟は由良の港を目指して由良の戸に乗り入れたのであり、其処は古事記¹¹にも記載があり、世に知られた怒涛の為に楫が漕げない所故舟の行方は定まらず、荒れ狂ふ波が舟を押し出すのは、瀬戸の由良側か反対の紀州側か、将また遙か紀州灘まで持つて行かれるか、漕ぐに漕げない舟人には予想出来ない。願はくは沖つ潮風（この場合東風）が吹いて、由良港側に舟を押し出してくれかしと頼むものゝ、その風も頼りにならぬ。と詠つてゐるもので、この歌は由良の港の直前に横たはる由良の戸の荒波と、それに翻弄されて漕ぐに漕げない舟をリアルに取り込んで、持み難き恋の行方を歌つたものとなつてゐる。

重ねて言ふが、「由良の戸」の荒波と、その余りの荒さに漕ぐに漕げない（楫を絶え）と言ふ事は一組のセットとして、南海道の入口の難所を指すものと考へるべきで、偶々好忠の故地の丹後にも由良があるからと言つて、好忠の歌の由良は丹後の由良であるなどゝするのは、寧ろ好忠個人に寄り掛かつた安易な解釈かと思はれる。

「由良の戸」では怒涛の為に漕ぐに漕げないのであるとすれば、切れた楫緒など、繋ごうと繋ぐまいと情況には何の関はりもなく、為家の歌が凡そ見当はずれの反歌となつてしまふのは致し方のない処ある。

先の常縁原選本の新古今集聞書には元歌である好忠の歌は取り上げられず、良経の歌にのみ註が施されてゐるのは、好忠の歌もこの註に基づいて解すべしとしてゐるかに見えたが、室町期末期に出たかとされる新古今和歌集抄出聞書¹²で取上げられてゐるのは好忠の歌のみで、それには

由良、紀州也。難儀のわたり也。かぢをたえとは、うしなひたる心也。船中にてはかぢ肝要也。(後略)

と注があるが、紀州の由良の近傍に「難儀のわたり」などは存在せず、従つて狂涛と楫漕ぎ停止の組み合わせなど有り様もなく、「かぢを絶え」は理不尽にも「楫失ひ」とされ、良経の歌とは無縁の歌の如く扱はれてゐる。又、「失ふ」と「絶ゆ」では概念が異なつてゐて、前者ではそのもの自体の存滅は問ふ所ではないが、後者ではその存在は消滅するのである。

此れに次いで成つたかと思はれる新古今集聞書¹³では、この歌に対する注は次のやうになつてゐるが、

ゆらの戸は、紀伊国より四国へわたる所なり。難波なり。そのわたりにて楫をたやし侍れば、行多もなくなるなり。それにわが恋をたとへて読り。

「楫をたやし」の「たやす」は本来「火をたやす」、「財をたやす」の如く消滅に終はる事象に用ひられるもので、こゝは誤用であり^{14, 15}、言はんとする処も判じ難い。

由良の戸の所在は斯くて淡路に修正され、聽て好忠故地の丹後の由良への関心が高まる。好忠、良経の「かぢを絶え」の二つの歌の解釈は互ひに独立して江戸中期まで受け継がれたが、その後は自然と前者の歌の解釈に収斂されたものゝ様に見える(八代集抄¹⁶)。結

果として南海道の実地の地理が醸し出す緊張感は消滅し、「かぢを絶え」の解釈も定まらぬ儘に、二つの歌の解釈も亦行方も知れぬ混迷状態のまゝ残されてゐるのが現況と言ふべきであらうか。

例歌から導き出した、「かぢを絶え」を「漕ぐのを止めて」とする解釈が元歌の好忠の歌にも、それを踏まへた良経歌にも通ずるものである事が判つたが、此処での「かぢ」が普通名詞ではなく、今日では余り使はれない抽象名詞である事に、或ひは馴染めない向きもおいでも知れないので、次に其れに就いて聊か考察を加へる。

四、抽象名詞「かぢ」の用例

漕具としての「かぢ」に当たる漢字は少なくない。それ等は漢字としては当然ながら、夫々道具としての具象名詞であると共に、「かぢ」で漕ぐ意味の動詞でもあり、且又その動作の抽象名詞でもある。抽象名詞としての「かぢ」は日本語には余り馴染まぬやうであるが、漢語としては幾つかの用例があり、楫師、榜人、櫂歌等が挙げられるものゝ、和語としては殆どその用例は無いやうに見える。然し「かぢ」で万葉集⁸を検索してみると

読人不知

万葉集 1143

さ夜深^よけて堀江漕^こぐなる松浦船楫^{まつらふねかぢ}の音高^{ねたか}し

水脈^{みづ}早^{はや}みかも

全 右 1152

楫^{かぢ}の音^ねそほのかにすなる海未^{うま}通^{とお}女^め沖^{おき}つ藻^も狩^{かり}りに

船出^{ふねで}すらしも

などの「楫」はそれに当たり、波が早ければ楫使ひも忙しくなる事が知られる。

又、偶々万葉集の「間」の用例検索¹⁷⁾の際に見出した次の二首の「楫」などもその例に当たるものと思はれる。

読人不知

万葉集 3894 淡路島門渡る船の楫間にもわれは忘れず

家をしそ思ふ

大伴家持

全 右 4048 垂媛の浦を漕ぐ船楫間にも奈良の吾家を

忘れて思へや

何れの「楫間」も同じ意味で、日本古典文学大系本⁸⁾の大意では、前者で「櫓を漕ぐ絶え間」としたものを、後者では「櫓の音の絶え間」と、元の歌には詠まれてゐない「音」を入れてゐるのは、「楫漕ぎ」はこの場合その音でのみ認知され得る故であらう。則ち「楫間」の「楫」は「楫を操作する」事を現はす抽象名詞であり、「楫間」の「間」はその操作の「絶え間」を指してゐるのである。

始の歌は『淡路島の、西ならば鳴門海峡、東ならば紀淡海峡の激しい潮流(東とすれば由良の港の目前であるから、由良の戸と言つて良いであらう)では、其れを乗り切る楫の操作は多忙を極め、その絶え間など無きに等しいが、そんな有るか無きかの短い間でさへ、忘れる事無く家の事を思つてゐる』となり、次の歌では場所が垂姫の浦(越中、現在地不明)に変わり、家の所在が奈良に特定された他は、

歌趣は同様である。

蛇足ながら付言すれば、此処で使はれてゐる「間」は、それに先行する叙述が当て嵌まらぬ合間を意味してゐるもので、他には次ぎのやうな例がある。

万葉集 1899 春されば卯の花ぐたしわが越えし妹が垣間

は荒れにけるかも

全 右 2450 雲間よりさ渡る月の鬱しく相見し子らを

見むよしもがな

全 右 3214 十月雨間もおかず降りにせばいづれの里の

宿か借らまし

「垣間」は生垣の木が途切れてゐる空き間であり、「雲間」は雲が消えてゐる隙き間で、「雨間」は「雨降り(抽象名詞)」が一寸止んだ合間をさしてゐるのは言ふ迄も無い。

同様な事は次ぎの歌にも当て嵌まる。

万葉集 2746 には清み沖へ漕ぎ出る海人舟の楫取る間無き

恋もするかも

全 右 3173 松浦船さわく堀江の水脈早み楫取る間なく

思ほゆるかも

全 右 3961 白波の寄する磯廻を漕ぐ船の楫取る間なく

思ほえし君

全 右 4027 香島より熊来をさして漕ぐ船の楫取る間なく

都し思ほゆ

全右 1836 防人の堀江漕ぎ出る伊豆手船楫取る間なく

恋は繁けむ

此に依つて、先に挙げた二例の「楫間」の「楫」は、此れ等五例の「楫取る」と同義で抽象名詞である事が理解出来るであらう。

猶この第三例では「白波」は怒濤であり、「楫」は転覆を免れんが為に忙しいのであらうから、状況は良経の「由良の戸」の歌と変はる処がなく、既に万葉に同じ趣向の前例があつたのは一驚であつた。始めに掲げた二例を含め「漕ぐ事」を表す抽象名詞の「楫」の概念が上代に通行してゐた事を万葉集が示してゐる訳で、それから平安期に入つて好忠の歌に現れ、更に二百年を経て良経、家隆、経通他多くの人々に依つて花咲いたと考へても、何の不都合も無いやうに思はれる。

好忠の歌の「楫」は具象名詞であるよりも、其れを操作する動作の抽象名詞である事、そして続く「絶え」はその動作の停止である事が理解されねばならない。

五、結語

由良の戸と言へば、言葉の響きも良く字面のイメージも良く、其れだけで何かしらロマンチックな雰囲気に含まれるが、それは多分に曾禰好忠の歌の所為かも知れない。

曾禰好忠は由良の戸で起こり得る災難を取り上げて、恋の行方の量り難さを我々の知る名歌に仕上げたが、大方の受けは如何であつたのか、恐らくは現代と同様理解は未だしであつたのではなからう

か。新古今和歌集に至るまで顧みられる事がなく、何れの歌集にも扱られなかつたのはその為かと思はれる。

下つて平安末期になつて藤原良経がより具体的に由良の戸の渡り難さを取り入れて詠むと、恰も好忠の歌が良経の歌を踏まへて詠じられたかに見えるのに驚かされた。

常縁原選本の新古今集聞書きが良経の歌のみ取上げて註し、好忠の歌に触れなかつたのは、恐らくは好忠の歌も良経の歌を踏まへて解すべしとしたものかと思はれるが、その意は未だに汲まれず、辻褄の合つた理解が望まれる所である

由良港直前の由良の戸と其処の荒波を踏まへて枕とした好忠、良経の作は印象深く、引用した如く多くの例歌を生んだのであるが、好忠、良経が詠み込んだ往時の脅威が、現代でも猶依然として脅威である事を現地の漁師の声から知つたのは驚きであつた。

(追記)

土佐日記¹⁸では、一月三十日、「海賊は夜歩き」すまいと「夜中ばかりに」土佐本島の土佐泊を出てからは、「安波の水門」、「沼島」、「多奈川」と次々に過ぎ、その後は「からく漕ぎて、和泉の灘」に到達してゐる(和泉は大阪南部)。(貫之と好忠は略同時代人である)。

「阿波の水門」は「鳴門」で「からく神仏を祈りてこの水門を渡り」、次に「沼島(今日も同名)」を過ぎ引き続いて「多奈川」を「渡る」が、「渡る」からには潮流で、此れが「由良の戸」に当たるものかと思はれる(私見)。恐らくは潮時が良かったか荒波を漕ぎ渡つた記載はなく、世に聞こえた難所もさしたる事も無く過ぎた事を示してゐる。

(注)

- (1) 平安鎌倉私家集、日本古典文学大系 80、高木・久松他監修、岩波書店、一九七六
- (2) 新古今和歌集、日本古典文学大系 28、久松・山崎・後藤校注、岩波書店、一九四八
- (3) 新編国歌大観、1～10巻、新編国歌大観編集委員会編、角川書店、一九八三
- (4) 日本語で一番大切なもの、大野晋・丸谷才一对談、中央公論社、一九七七
- (5) 百人一首増注、加藤盤齋著、青木賢豪解説、八坂書房、一九八五
- (6) 古語大辞典、中村祝夫他編、小学館、一九八三
- (7) 公卿補任索引、改訂増補公卿補任別巻一、黒板勝美他編、吉川弘文館、二〇一三
- (8) 百人一首注釈書叢刊2、百人一首経厚抄、有吉保他編、和泉書院、一九九五
- (9) 万葉集、日本古典文学大系 4～7、高木・五味・大野校注、岩波書店、一九六二
- (10) 常縁原選本新古今集聞書、新古今集古注集成、中世古注編1、新古今集古注集成の会編、笠間書院、一九九七
- (11) 古代歌謡集、古事記歌謡75、日本古典文学大系3、土橋・小西校注、岩波書店、一九八〇
- (12) 新古今和歌集抄出聞書、新古今集古注集成、中世古注編2、新古今集古注集成の会編、笠間書院、一九九七
- (13) 新古今集聞書、以下先に同じ
- (14) 角川古語大辞典、中村・岡見・板倉編、角川書店、一九九四
- (15) 時代別国語大辞典、室町時代編2、室町時代語辞典編集委員会編、三省堂、一九九四
- (16) 八代集抄、新古今集古注集成近世古注編3、新古今集古注集成の会編、笠間書院、一九九七
- (17) 万葉集総索引単語編、正宗敦夫編、平凡社、一九九四
- (18) 土佐日記、新日本古典文学大系24、長谷川政春校注、岩波書店、一九八九